

題名：今だからできること

鷹巣中学校 二年 佐藤花穂

「ヘルプマーク」このマークのことを日本人のどれぐらいの人が知っているでしょうか。

私はSNSでヘルプマークを知りました。その内容は同じ年代の女の子が公共の窓口からヘルプマークをもらっている姿でした。見たことのないマークだったので、気になり、調べてみました。

ヘルプマークとは障害者が侵されがちな人権を守るための手段であり、見ただけでは分からなくても、内部障害や難病を持っている人ということを示すマークです。周囲の方に配慮を必要としていることを知らせ、援助を得やすくしています。そして鞆などに見えやすいようにつけています。

私は実際、ヘルプマークを持っていた高齢者に会ったことがあります。隣には、補助していた人もいました。ヘルプマークを持っていた人は足が悪いのか、歩くのもゆっくりで、杖を持って狭い橋を歩いていました。その橋は自転車道が二台すれ違うだけでも結構きついです。私と友達は自転車を下校中。ヘルプマークを持っていた人と補助していた二人の後ろに並んでいました。友達が私の前にいて、前の二人を越そうとしていました。友達の前を歩いていた二人は歩くのに一生懸命で後ろに私たちがいることに気づいていませんでした。その時私はヘルプマークが杖を持って歩いていた高齢者のリュックについていることに気がつきました。前の友達はヘルプマークを知らなかったのか、自転車道で音を立て、前の二人に自分たちの存在を気づかせようとしていました。補助していた人が気付いてくださり、私たちは二人を越しました。

私は、越した後、すぐ申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。私が友達に教えてあげていたらな。声をかけて気付かせていたらな。自転車から降りてゆっくり越してあげていたらな。すごく悪いことをしてしまったと感じました。

私の母もリュックにヘルプマークをつけた女性を電車の中で見たそうです。その人は学生のように、障害を抱えているようには見えなかったそうです。ヘルプマークに気付けたことで、もし隣の人が発作を起こした時に少しでも

も手助けできるのかもしれないと思ったようです。

その話を聞いて私は改めてヘルプマークを使っている人について調べました。義足や人工関節を使用している方、妊娠初期の方などがありました。障害では、発達障害、知的障害、精神障害などです。ヘルプマークをつける人も勇気が必要なのかと感じました。しかし、家族の視点から考えると安心できるマークなのだと思います。

今、日本は急激に、少子高齢化が進んでいます。また、小さいときから持っている障害や難病を抱えていたり、年を経て病気が見つかったりしている人も少なくはありません。そういう方たちに出会ったら、細かな気遣いが大事だと思います。例えば電車やバスの場面。席がいっぱいでした。立っているのが少しでも大変そうに見えたら優しく話しかけ、譲ることができるといいと思います。他にも、歩くのが大変そうだと感じたなら物を持ったり、近くで一緒に歩いたり。ヘルプマークを持っている方や高齢者の人たちより、若い人のほうができることや、力があると思います。誰でも一度は自分の祖父母や近所の人など、高齢者を助けたことがあるのではないのでしょうか。

私は、知らない高齢者の方に道を聞かれて教えたことがあります。

「ありがとね。」

という一言が嬉しく感じました。教えてもらった人も教えてくれたという嬉しさがあるかと思っています。自分と相手の気持ちを通じ、社会が明るくなっていくのです。

このように、細かいことでも自分にできることを考え、気遣うことが大切です。私が会ったヘルプマークを持った方は高齢者でしたが、子どもでも持っている方がいます。

理想はヘルプマークがなくてもお互い助け合える社会です。そこに少しでも近づくようまず、今は多くの人がヘルプマークのことを知り、それを付けている人に気付き、思いやりの気持ちをもち、接することが大切なのではないでしょうか。

題名：相手を思いやって

森吉中学校 一年 九島朱愛

私の父と母は、障がい福祉施設で働いています。そして母は、耳に障がいのある人と一緒に手話を習っています。初めて母の職場に行ったとき、私はまだ小学校低学年で、まだ障がいというものを理解できず、怖いという気持ちからか、障がい者の方を前に大泣きして、母の車に逃げてしまったのを覚えています。今、その行動を振り返ると、恥ずかしく、後悔の気持ちしかないです。しかし、それから少しずつ慣れていき、段々、障がい者の方を理解できるようになっていきました。さらに、小学校の後半になると、障がい者の方と会話できるようにまでなりました。いつも、母の車に乗っていると、わざわざ外に出てきて、私とお話ししてくれました。このようなふれあいを通して、はじめに抱いていた「怖い」という気持ちがなくなり、障がい者の方はとても優しく、思いやりがあることに気付くことができました。

また、私の祖母の弟も障がい者です。病気をしてから、体の右の方が麻痺して、不自由になりました。車イスにも乗らず、杖もつかずに、一生懸命に動いています。大変なのに、会うといつも、とても元気に話しかけてくれます。周りの目を気にして、辛かったことがあったはずなのに、そのようなことを私たちに考えさせないくらい、明るく笑顔で迎えてくれます。私は、おじさんを見ると、とてもやる気が出てきます。頑張らなきゃ、という気持ちになります。障がい者の方が元気なのに、私たちが暗くしていたら、障がい者の方も元気がなくなると思ったからです。だから私は、おじさんの前では、常に元気であることを心がけています。それは手話のサークルでもそうです。私が小学生の頃、時々、手話のサークルに参加していました。初めて参加したのは、難聴者の方々とのパークゴルフです。その時は私も障がい者の方を理解できていたので、いろいろ気遣いながら、とても楽しめました。しかし、私は手話が一切できなかったもので、自分から会話することができませんでした。その時、サークルの先生も難聴者だったけれど、先生の方からジェスチャーをつかいながら話しかけてくださって、コミュニケーションを取ることができました。とてもうれしく思いました。難聴であることで、人との関わりに消極的になるのではなく、積極的にコ

ミュニケーションをとろうとする姿勢に驚きました。気持ちを「伝えたい」という気持ちがあれば、言葉がなくても通じ合えるのだと感じました。

これをきっかけに、手話を覚えたい気持ちが芽生え、参加できる時は手話サークルに行くようになりました。学校でも手話の体験があったりして、楽しかったし、とてもいい経験になったと思います。

その後、手話サークルで小学生を募集して、手話の体験会をすることがありました。私はサークルメンバーとして、受付をしたり、体験の様子を見守ったりしました。受付では、ワクワクしながら会場に入ってくる小学生を見て、興味を持ってくれているのだと感じ、とてもうれしくなりました。手話を使って歌を歌うところでは、みんなが楽しそうにやっていたので、私もこのサークルに参加してよかったと思ったし、このような活動に参加する小学生や中学生がもっと増えてほしいと思いました。

このような体験から、私は、障がい者への差別や、変な偏見をもつことは本当にだめだと思いました。障がい者の方だって、私たちと同じで、この世界で生きていて、みんなそれぞれ、頑張っています。私たち健常者よりも生き生きと活動して、人生を楽しんでいる人もたくさんいます。実際、難聴者の方と接して、言葉が伝わらないからと諦めるのではなく、伝え方を工夫して、なんとかコミュニケーションを取ろうとする力に圧倒されたし、力強さを感じました。

人と人との関わり合いは、気持ちが一番大切です。難聴者の方は、言葉を使えない分、相手の表情を見たり、その場の雰囲気を知り、行動しているのではないかと思います。パークゴルフで会話ができずに困っていた私に、ジェスチャーで接してくれた優しさ。思いやりにあふれた行動だったと感じます。

障がいがあってもなくても、人と関わっていききたいという気持ちがあれば、お互いに豊かな生き方ができるのではないでしょうか。私はこれから自分のできることを考えながら、相手への思いやりの心をもって人と関わっていききたいと思います。

『「ふつう」ってなんだ？』

図書館の片隅にあったこの本を、私が手に取ったのは今年の五月。ある友達の言葉がきっかけでした。その友達はアンケートの冒頭によくある、男か女のどちらかを選ばないといけないのが嫌だ、と言っていました。この世界には男と女しかない。動物だってオスとメス、植物ならおしべとめしべ。それが当たり前だと思っていた私は、その言葉に衝撃を受けました。

「LGB」という言葉を聞いたことはありませんでしたが、詳しくは知りませんでした。だから『「ふつう」ってなんだ？「G」について知る本』を図書館で見つけたとき、迷わず手に取り、開いてみました。

性の在り方は「男性のからだをもって生まれ、自分を男性だと思って成長し、女性を好きになる」か、「女性のかからだをもって生まれ、自分を女性だと思って成長し、男性を好きになる」の二通りが、長年、一般的とされてきました。しかし、そうでもない場合の人たちもいることが最近社会的に広まり、前向きな表現として使い始めたのが「GL」です。「GL」は、「同性を好きになる人」や「こころの性とからだの性が合っていない人」だけでなく、「こころの性が移り変わる人」や「性を決めたくない人」などを含めた総称として使われることもあります。私の友達は性を決めたくない「クエッションング」という性の在り方になるようです。現在日本では十人に一人が「GL」だと言われている、その多さに驚きました。

実は私も、制服のスカートに違和感を感じ、なんとなく似合わないな、と思うときがあります。正直、ズボンの方が動きやすいし、自分らしい気がします。髪型もずっとショートヘアです。きつと「GL」の人たちは、私が感じている十倍も百倍も違和感を感じ、苦しんでいるのでしょうか。「性的少数派」(セクシャルマイノリティ)として周囲から理解してもらえず、「気持ち悪い」「普通じゃない」などと、心ない言葉を投げつけられ、傷ついている人がたくさんいることを知り、心が痛みました。

私は友達と話をしたとき、驚きはしたけれど「変だ」とは思いませんでした。人それぞれ考え方、感じ方は違うのだから、性の在り方についても違うと思ったからです。そんな私が「GL」について調べていく中で、興味を持ったのが「アライ」という存在です。

「アライ」とは、「味方」を意味する単語で、「LGL」を理解し、応援する人」を表しています。「LGL」の人たちは、生活の中で困難や疎外感を感じたり、傷ついたりすることが多く、問題を一人で解決するには大変です。その時に少しでも気持ちに寄り添い、励ましたり、一緒に考えたり、問題解決に取り組んでくれる人がいたら、きつと心強いはずです。また、「アライ」であることを可視化できるよう、「GL」のシンボルである虹をモチーフにしたものを身につける、という活動もしていることを知り、私はとても興味をもちました。

全ての人の価値観と向き合い、少数派、つまりマイノリティを理解し応援する、という「アライ」の精神。最近では「LGL」に限らず、障害者や外国人といったマイノリティに対しての支援としても「アライ」という表現は使われるそうです。違いに対して味方でありたいという「アライ」の姿勢は、生活の中の多くの場面で生かされるのではないかと思います。思うように動けない高齢者の方や泣いている赤ちゃんに困っている子育て中のお母さん、みんなとは違う意見を勇気を出して言った友達。それぞれの立場に対して、味方でありたい、寄り添ってあげたいと思う気持ちが大切だと考えます。

私は生徒会長を務めています。生徒総会のような全校での話し合いから、代表者で話し合う代表委員会、生徒会執行部など、様々な意見を受け止めたりまとめたりする場面があります。その場合、効率上、大多数を占める意見に意識が向いてしまいがちですが、少数派の意見もしっかり受け止めなければならぬと思います。同じ人間など一人もいないのだから、あらゆる違いに対して受け止める姿勢が大切です。自分自身がそういった広い視野、広い心をもって接すれば、きつと私の周りにも味方が増えるのではないかと思います。つまり、誰もが誰かの「アライ」になれるのです。

『「ふつう」ってなんだ？』。その答えははっきりとは分かりません。しかし、一般的な「ふつう」に当てはまらないマイノリティに目を向ける気持ちが生れました。これからの長い人生の中で、多種多様な人たちに会おうと思います。『「ふつう」にとられず、広い視野と広い心をもった人間になりたいと思います。それが、誰もが自分らしく生きられる世界につながることを信じて。』

題名：後悔から考えたこと

合川中学校 二年 庄司 暖

家で家族とテレビを見ているとき、とても考えさせられる話を目にした。それは全盲になった男性が、地元の小学生に助けられながら退職するまでバス通勤することができたという話だ。バス通勤を始めたときは小学生の長男と一緒にバスに乗っていたそう。でも長男が小学校を卒業し、男性は一人でバスに乗らなくなってはいけなくなってしまった。周りが見えないため、空いている席が分からず、とても苦痛だったという。そんな中、男性に

「おはようございます。」

と小学生の女の子が声をかけた。そして

「バス来ましたよ。」

と声をかけ、男性の腰に手を当ててバスまで誘導してくれたという。この女の子のほかにも、席に座っていた男の子達が席をゆずってくれるなどたくさんの小学生が男性を助けてくれていたそう。またこの女の子達が小学校を卒業してから、下級生の子達が助けてくれたという。この話を聞いたとき、私は心が温かくなった。私がもし、この女の子の立場だったら男性を助けられていただろうか。知らない目の不自由な男性を助けるということは簡単ではないと思う。だが女の子達は自分から進んで声をかけたのだ。私はとても感動した。私は似たような場面にあったことがあるが自分から声をかけられなかった。

それは今年の八月、ショッピングセンターへ買い物に出かけた日のことだ。雨と風がとても強く、かさがすぐに飛ばされてしまいそうな日だった。お店に入ろうと入口へ向かっているとき、強い風がふきカーンを押していたおじいさんの荷物が落ちてしまった。私はすぐに拾おうとしたがふと考えた。「もし拾っておじいさんの迷惑になったらどうしよう。触ってはいけないものなら怒られてしまうかも。」と。気づいたらおじいさんの隣を通り過ぎていた。自分の心に目に見えない何かが刺さっているかのように痛かった。私はとても後悔した。おじいさんに対して、とても申し訳がなかった。

今の日本は少子高齢化が進み、高齢の方が増えているという現状にある。共に障害のある人も多く暮らしている。障害には目に見える肉体的障害と目に見えない精神的障害がある。精神的障害は目で見て分からないものがほとんどだ。みんなが楽しく暮らせる社会を作るにはどうすればいいだろうか。地域では今、点字ブロックやスロープなどたくさん工夫がされている。前より暮らしやすい社会ができていると思う。だが、まだ完全ではない。よりよい社会を作るためには、私たちが障害や高齢化について興味をもつことが大切だと思う。みんなが興味をもち、障害・高齢化について知れば支え合いながら暮らせる社会を作ることができるはずだ。

そしてまた今回、似たような状況に遭遇した。それは私が眼科に行ったときのことだ。この日は先生が一人しかおらず、しかも午前中のみの診療でとても混み合っていた。席がいくつか空いていたため、私は席に腰かけた。席が全て埋まった頃、一人のおばあさんが病院にきた。そのおばあさんは足が悪いらしく杖をついていた。わたしはおばあさんに席を譲ろうと、勇気をだして

「よかったです、ここ座ってください。」

と言った。断わられたらどうしようかと少し不安になったが、おばあさんは笑顔で「ありがとうございます。」

と返してくれた。私はとてもうれしくなった。不安はあったものの声をかけることができてよかった。その後おばあさんとは少し身の回りの話をして別れた。その日は一日中とても幸せな気持ちで一杯だった。おばあさんも幸せだったら私はうれしい。このとき人に感謝されることの幸せさと、良いことをしたあとの幸せを改めて感じた。

これから困っている人を見かけたら自分から声をかけ、行動することを意識する。こうするためにはマイナスなことを考えるのではなく、プラスのことを考えることが大切だと思う。困っている人を助けると、助けられた人だけでなく自分もうれしくなる。私は人権とは人が楽しく、幸せに暮らせる権利だと考える。楽しく、幸せに暮らすには人との交流や支え合いが大切だと思う。人と交流することにより思いやりの気持ちを持ち、行動できる。また良いことをすると自分に返ってくるという言葉があるように自分に幸せが返ってくると思う。幸せの輪を自分から始めていきたい。だれもが楽しく暮らせる社会を作るために困っている人がいたら自分から声をかけ、人のために行動できる人になる。